

## 第4章 第4期(通常期)における勤務実態

### 1. 第4期の調査協力校の概況

第4期の調査期間は、平成18年9月25日(月)から平成18年10月22日(日)までの4週間である。

まず、第4期の調査協力校の時期的特徴について紹介する。

第4期において回答のあった309校のうち31校の小学校・中学校が10月5日から10月15日までの期間に、児童・生徒の秋季休業期(以下、「秋季休業期」)を含んでいる。

調査協力校における秋季休業期間の分布は表2-4-1のようになっている。

分布をみると、秋季休業期のある学校のうち、10月7日(土)から10月10日(火)または10月11日(水)と、10月10日(火)から10月11日(水)に秋季休業期となっている学校が、それぞれ16.1%(5/31校)と最も多い。また秋季休業期は、最短で1日、最長で9日である。

通常期と秋季休業期では、教員の業務における質と量に違いがあると考えられるため、第4期については、調査協力校の秋季休業期の情報をもとに、データを通常期と秋季休業期の2つの時期に分けて分析を行った。ただし、秋季休業期のある学校は1割(31/309校)と少ないため、第4期については、そのうち通常期のみについての報告を行う。つまり、秋季休業期のある31校については通常期のデータのみ使用し、秋季休業期のない278校についてはすべてのデータを使用する。

表2-4-1 第4期の調査協力校における秋季休業期間

秋季休業期間	10月5日(木) ~6日(金) (2日間)	10月6日(金) ~9日(月) (4日間)	10月6日(金) ~10日(火) (5日間)	10月7日(土) ~15日(日) (9日間)	10月7日(土) ~9日(月) (3日間)	10月7日(土) ~10日(火) (4日間)
		2 6.5	1 3.2	2 6.5	2 6.5	2 6.5
10月7日(土) ~11日(水) (5日間)	10月10日 (火) (1日)	10月10日(火) ~11日(水) (2日間)	10月10日(火) ~13日(金) (4日間)	10月11日(水) ~12日(木) (2日間)	計	
	5 16.1	1 3.2	5 16.1	3 9.7	3 9.7	31 100.0 校 %

※期間は調査協力校の回答による

## 2. 残業時間・持帰り時間および業務の内訳

### (1) 全体的な残業時間・持帰り時間の実態

まず第4期(通常期)の勤務日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-4-2)。

小学校では、残業時間は平均で1時間43分、持帰り時間は平均34分、これらを合わせた時間の平均は2時間18分である。

中学校では、残業時間は平均2時間08分、持帰り時間は平均21分、これらを合わせた時間の平均は2時間29分である。

また、小学校と中学校を比べてみると、勤務日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも25分長い。一方、持帰り時間の平均は小学校の方が中学校よりも13分長い。中学校では部活動があるために残業時間が長くなると考えられるが、小学校・中学校での残業時間・持帰り時間における業務内訳については、後の第3項において詳しくみる。

次に、第4期(通常期)の休日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-4-3)。

小学校では、残業時間は平均で22分、持帰り時間は平均で1時間25分、これらを合わせた時間の平均は1時間48分である。残業時間の中央値が0分であることからわかるように、小学校では休日に学校で業務を行う教員は少ないといえる。一方で、休日の残業時間と持帰り時間の中央値と平均値には20分以上のひらきがあることからわかるように、小学校では、次にみる中学校ほどではないものの、休日に残業や持帰り仕事をする人の間で、時間量の差が大きい(表2-4-3)。これは後の図2-4-3や図2-4-4からも確認できる。

中学校では、残業時間は平均1時間30分、持帰り時間は平均1時間41分、これらを合わせた時間の平均は3時間11分である。また、休日の残業時間と持帰り時間の中央値と平均値におよそ40分から50分のひらきがあることからわかるように、中学校では休日に残業や持帰り仕事をする人の間で、時間量の差が大きい(表2-4-3)。これは後の図2-4-3や図2-4-4からも確認できる。

小学校と中学校を比べてみると、休日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも1時間08分長い。小学校と中学校それぞれの残業時間における業務内訳については、後の第3項で述べるが、中学校においては部活動を行っているために長くなると考えられる。

以上、第4期(通常期)の勤務日と休日を比べてまとめておこう。

小学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも1時間09分長く(表2-4-2)、休日においては、持帰り時間の方が残業時間よりも約1時間長い(表2-4-3)。特に持帰り時間については、勤務日より休日の方が1時間ほど長くなっており、休日には学校で業務を行わないものの、自宅で持帰り仕事を行っている様子がうかがえる。

中学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも1時間47分長く(表2-4-2)、休日においては、残業時間量と持帰り時間量はそれほどは変わらない(表2-4-3)。持帰り時間については、勤務日より休日の方が1時間20分長い(表2-4-2、表2-4-3)。

表2-4-2 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	1時間43分 〔1時間34分〕(1.024)	34分 〔19分〕(0.679)	2時間18分 〔2時間10分〕(1.226)
中学校	2時間08分 〔2時間01分〕(1.142)	21分 〔8分〕(0.528)	2時間29分 〔2時間23分〕(1.262)
全体	1時間57分 〔1時間48分〕(1.108)	27分 〔12分〕(0.613)	2時間24分 〔2時間17分〕(1.249)

〔 〕内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

表2-4-3 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	22分 〔0分〕(0.889)	1時間25分 〔1時間00分〕(1.499)	1時間48分 〔1時間23分〕(1.708)
中学校	1時間30分 〔38分〕(2.006)	1時間41分 〔1時間03分〕(1.967)	3時間11分 〔2時間51分〕(2.500)
全体	59分 〔0分〕(1.688)	1時間34分 〔1時間00分〕(1.772)	2時間33分 〔2時間00分〕(2.280)

〔 〕内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

(2)個人単位でみた残業時間・持帰り時間の実態

前項では、第4期(通常期)の教員全体における残業時間量・持帰り時間量の平均に注目した。しかし、すべての教員が一様に残業や持帰り仕事を行っているわけではなく、これらの時間は、教員間での差が大きいと考えられる。

そこで、第4期(通常期)における教員一人あたりの平均残業時間量および平均持帰り時間量の分布をみたものが、図2-4-1から図2-4-4である。

以下、勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、それぞれ小学校、中学校の結果を検討していく。

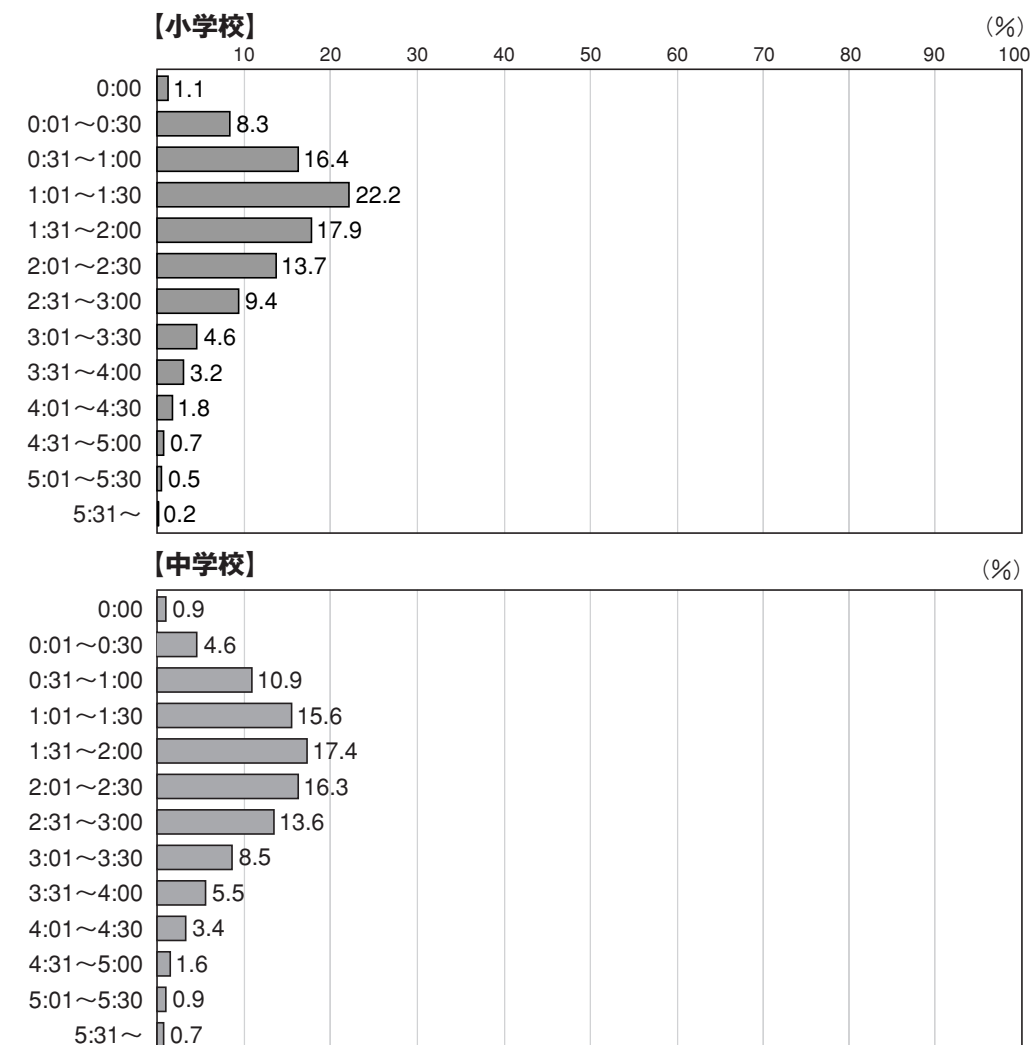
まず、第4期(通常期)の勤務日における平均残業時間量について検討しよう(図2-4-1)。

小学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が1.1%で、残業を行わない教員はほとんどいない。平均残業時間が30分以下(0分をのぞく)は8.3%、31分～1時間以下は16.4%となっており、約25%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。また、残業が1時間01分～1時間30分以下の教員は22.2%、1時間31分～2時間以下の教員は17.9%と、2時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員が6割強である。また、2時間01分～2時間30分以下の残業を行う教員は13.7%、2時間31分～3時間以下の教員は9.4%、さらに、3時間を超える残業を行う教員も1割いる。

中学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が0.9%で、残業を行わない教員はほとんどいない。平均残業時間が30分以下(0分をのぞく)は4.6%、31分～1時間以下は10.9%となっており、約15%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。これに対して、平均残業時間が1時間01分～1時間30分以下の教員は15.6%、1時間31分～2時間以下の教員は17.4%と、2時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員はおよそ5割である。また、2時間01分～2時間30分以下の教員は16.3%、2時間31分～3時間以下の教員は13.6%である。3時間を超える残業を行う教員は2割に達する。

以上から小学校・中学校ともに、勤務日にはほとんどの教員が残業を行っており、残業時間については、小学校では、6割強の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っていることがわかる。一方、中学校では、平均残業時間が2時間以下(0分をのぞく)の教員はおよそ5割であり、小学校よりも中学校の方が、概して残業時間が長い傾向にあるといえる。

図2-4-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量の分布



次に、第4期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-4-2)。

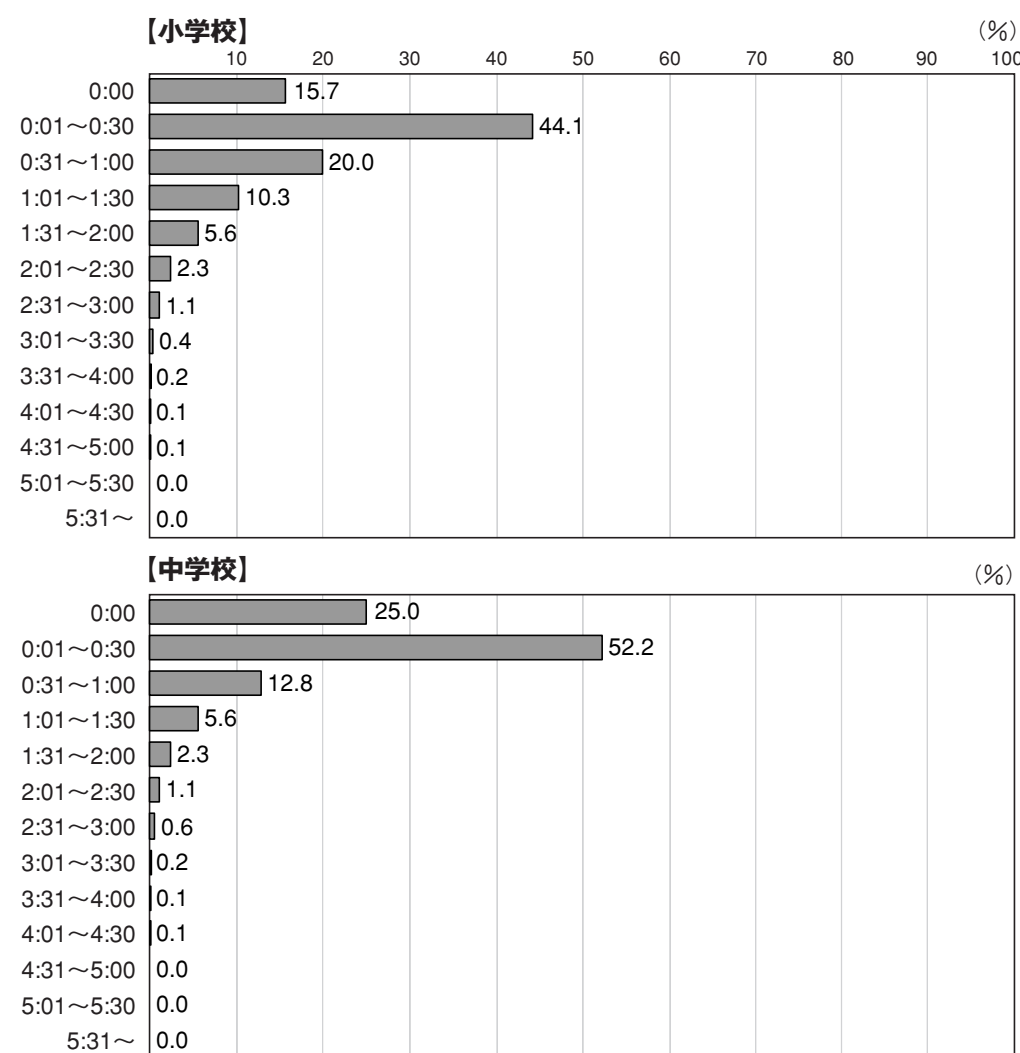
小学校の教員の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が15.7%であり、持帰り仕事を行わない教員は15%ほど存在する。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は44.1%、31分～1時間以下は20.0%であり、6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は2割いる。

中学校の教員の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が25.0%で、持帰り仕事を行わない教員は4人に1人である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は52.2%、31分～1時間以下は12.8%となっており、6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は1割である。

以上、第4期(通常期)の勤務日について、勤務日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では15%ほど、中学校では25.0%いる。また、小学校・中学校いずれにおいても、6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。

第4期(通常期)の勤務日の残業時間と持帰り時間の実態についてまとめると、ほとんどの教員が残業を行っており、小学校では6割強、中学校ではおよそ5割の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている(図2-4-1)。持帰り仕事をしていない教員は小学校では15%ほど、中学校では25.0%である。一方、持帰り仕事がある教員の方が多く、小学校・中学校とも6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている(図2-4-2)。

図2-4-2 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



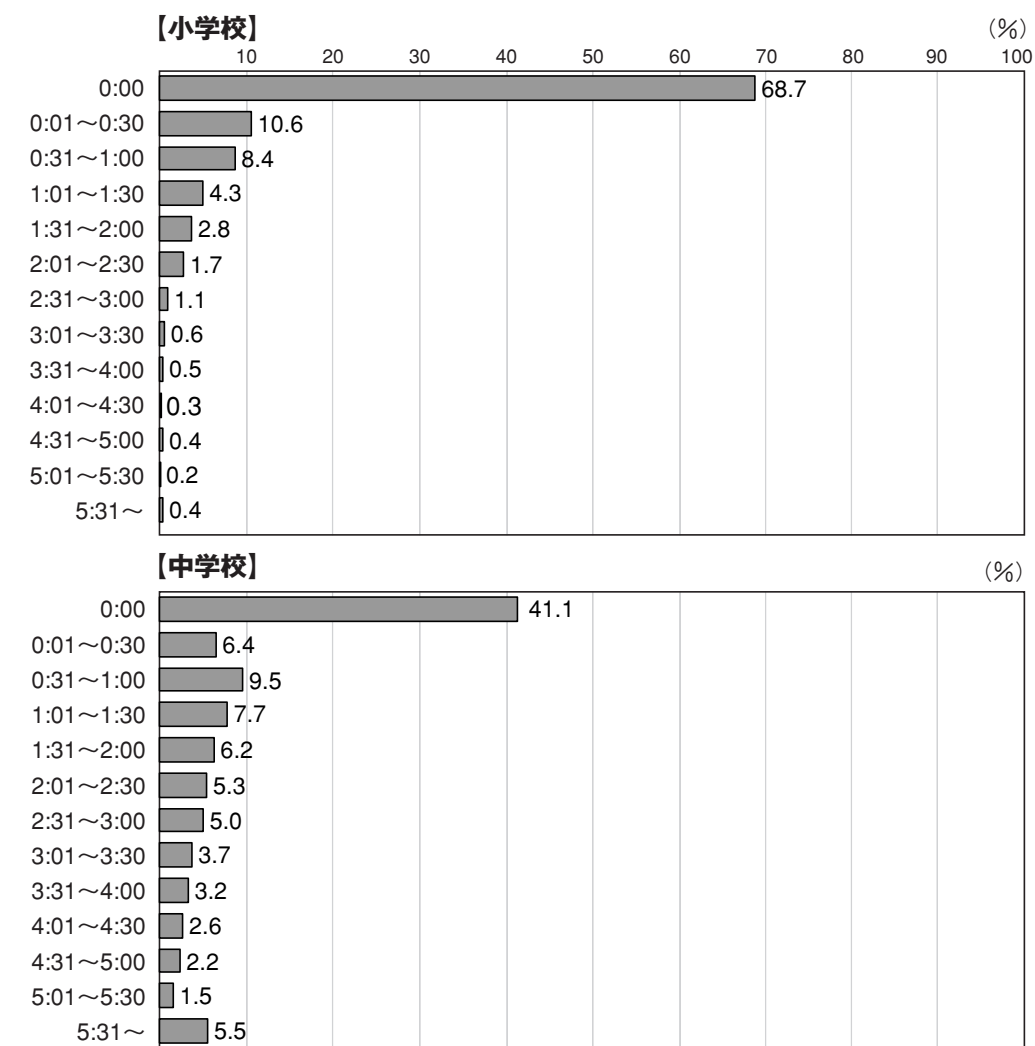
次に、第4期(通常期)の休日における平均残業時間量について検討しよう(図2-4-3)。

小学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が68.7%で、残業を行わない教員は7割弱である。勤務日(図2-4-1)と比べると、休日には7割弱の教員が学校に出勤してはいないといえる。一方、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員が2割ほど、1時間01分～3時間以下の残業を行う教員も1割ほどいる。

中学校の休日の平均残業時間の分布は、0分が41.1%で、残業を行わない教員は4割いる。勤務日(図2-4-1)に比べると残業を行う教員は少ない。また、小学校に比べ休日に残業を行う教員が多い。残業時間は教員間での差が大きく、残業時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員が約16%、1時間01分～2時間以下の教員が1割強、2時間01分～3時間以下の教員が1割、3時間01分～5時間以下の教員が1割強いる。さらに、休日に学校で5時間を超える業務を行う教員が7.0%存在するのは、小学校にはない中学校だけの特徴であるといえる。この時間に行っている業務としては部活動などが考えられるが、実際に中学校の教員が休日の残業時間にどのような業務を行っているのかは、後の第3項において紹介する。

以上をまとめると、次のようにいえる。第4期(通常期)の休日の残業時間について、休日に残業を行わない教員は小学校では7割弱、中学校では4割ほど存在する。また、特に中学校において、休日の残業時間は個人差が大きく、幅広い時間帯に教員が分布している。

図2-4-3 休日・1日あたりの平均残業時間量の分布



次に、第4期(通常期)の休日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-4-4)。

小学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が2割弱で、勤務日(図2-4-2)よりもやや多くなっている。休日でも8割の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員間での差が大きいことがうかがえる(図2-4-4)。平均持帰り時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員は32.0%、1時間01分~2時間以下の教員は約24%、2時間01分~3時間以下の教員は約13%、3時間01分~5時間以下の教員は1割、さらに5時間を超える教員は3%ほど存在する。

中学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が2割強で、勤務日(図2-4-2)とそれほど大きな差はない。休日でも8割弱の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員間で差が大きい。持帰り時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員は約26%、1時間01分~2時間以下の教員は約18%、2時間01分~3時間以下の教員は1割、3時間01分~5時間以下の教員は1割強、さらに5時間を超える教員も8%ほど存在する。

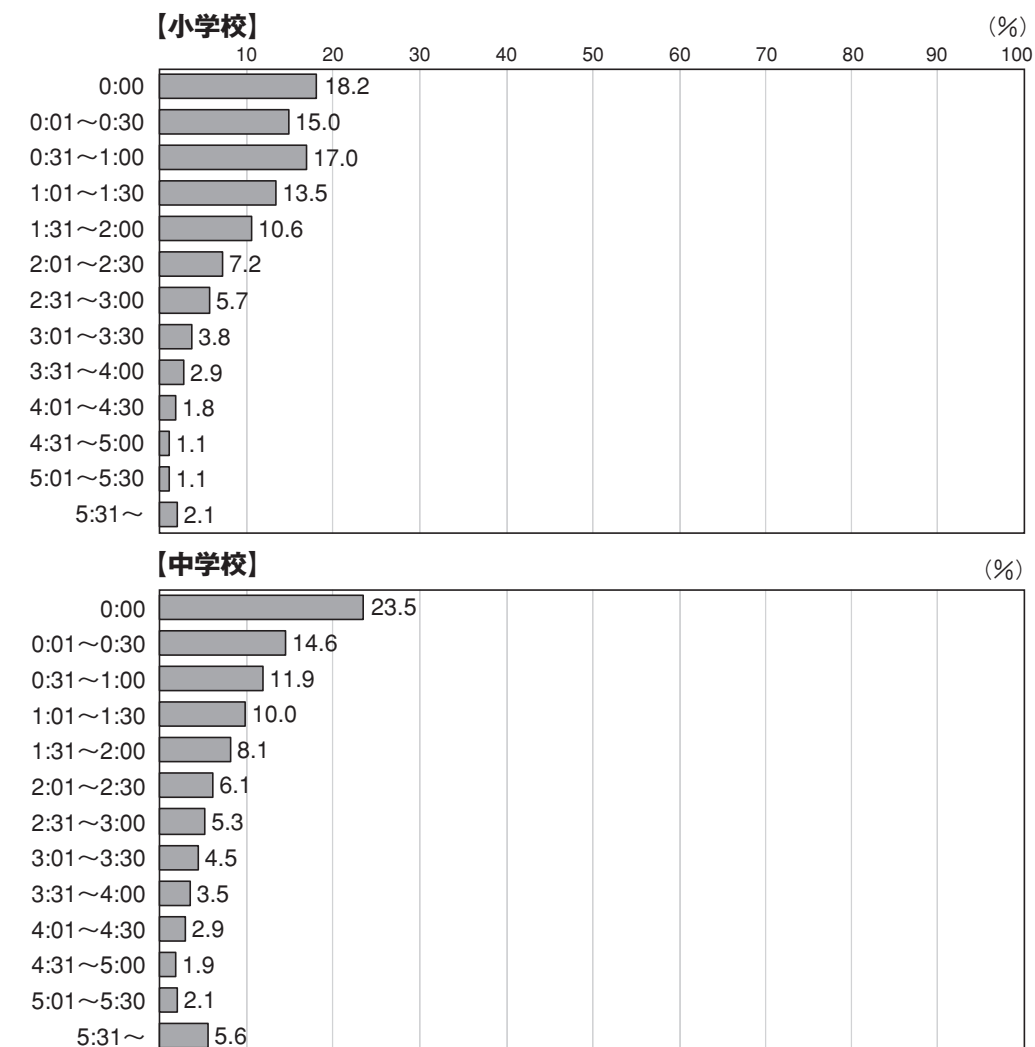
以上、第4期(通常期)の休日の持帰り仕事について、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校、中学校ともに2割ほど存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員間で差が大きく、5時間を超える長時間の教員も小学校で3%ほど、中学校では8%ほどいる一方で、30分以下(0分をのぞく)と短時間の教員も15%ほど存在する。

第4期(通常期)の休日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業時間については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割弱、中学校では4割ほど存在する。また、中学校では、教員間での残業時間の差が大きい(図2-4-3)。持帰り時間については、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割弱、中学校では2割強存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員によって差が大きい(図2-4-4)。

以上から次のことが指摘できる。

第4期(通常期)においては、勤務日には、ほとんどの教員が残業を行っており、小学校では6割強の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている(図2-4-1)。休日には残業を行う教員は小学校では3割強、中学校では6割弱となり、その残業時間には個人差がある(図2-4-3)。持帰り仕事を行う教員の割合は、小学校・中学校のいずれにおいても、勤務日では30分以下(0分をのぞく)の割合が最も多く(図2-4-2)、休日では0分が最も多く、時間が増えるにつれて割合が減少する傾向がみられる(図2-4-4)。小学校・中学校いずれにおいても、勤務日の持帰り時間は6割強が1時間以下(0分をのぞく)に集中するが(図2-4-2)、休日の持帰り時間は、教員間での差が大きい(図2-4-4)。

図2-4-4 休日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



(3) 残業時間・持帰り時間における業務内訳

前項では、第4期(通常期)における教員一人あたりの平均の残業時間量・持帰り時間量の分布について注目したが、本項ではこれらの時間にどのような業務を行っているのか、業務の内訳を検討する。

第4期(通常期)における勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校のそれぞれで業務の上位5種類の内訳を検討していこう。

まず、第4期(通常期)の勤務日について検討しよう(表2-4-4、表2-4-5)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校・中学校いずれにおいても最も長いのは、授業準備であり、小学校で27分、中学校で22分である。小学校で2番目に長いのは成績処理で13分、つづいて事務・報告書作成が9分、会議・打合せが8分である。中学校では2番目に長い業務は部活動・クラブ活動で18分、つづいて成績処理で12分、事務・報告書作成が11分である。ここから、小学校・中学校ともに残業時間における業務内訳では授業準備が最も長く、中学校の部活動・クラブ活動をのぞくと、成績処理や事務・報告書作成などの事務作業の時間が長いといえる(表2-4-4)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校・中学校ともに最も長いのは授業準備で、小学校では13分、中学校では6分である。2番目に長い業務は、小学校・中学校ともに成績処理で、小学校では8分、中学校では5分である。3番目から5番目に長い業務は、小学校・中学校ともに、学年・学級経営が1~3分、事務・報告書作成が1~2分、その他の校務が1分ずつである(表2-4-5)。

表2-4-4 勤務日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	授業準備	27分	授業準備	22分	授業準備	24分
2	成績処理	13分	部活動・クラブ活動	18分	成績処理	13分
3	事務・報告書作成	9分	成績処理	12分	部活動・クラブ活動	10分
4	会議・打合せ	8分	事務・報告書作成	11分	事務・報告書作成	10分
5	学校経営	8分	学校行事	8分	会議・打合せ	8分

表2-4-5 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	授業準備	13分	授業準備	6分	授業準備	9分
2	成績処理	8分	成績処理	5分	成績処理	6分
3	学年・学級経営	3分	学年・学級経営	1分	学年・学級経営	2分
4	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	1分	事務・報告書作成	2分
5	その他の校務	1分	その他の校務	1分	その他の校務	1分

次に、第4期(通常期)の休日について検討しよう(表2-4-6、表2-4-7)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校では授業準備が最も長く4分、以下同じ値で、保護者・PTA対応、事務・報告書作成、地域対応、成績処理がそれぞれ2分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く62分、つづいて授業準備と成績処理が4分である。以下、その他の校務と事務・報告書作成が3分である。中学校の部活動・クラブ活動をのぞき、平均残業時間は5分以下と短い(表2-4-6)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校では授業準備が最も長く33分、つづいて成績処理が16分、事務・報告書作成が7分、学年・学級経営が5分、その他の校務が5分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く41分、つづいて成績処理が18分である。以下、授業準備が15分、その他の校務が5分、事務・報告書作成が4分である。休日の平均持帰り時間における業務内訳は、小学校では成績処理や授業準備が長く、中学校では部活動・クラブ活動の時間が長い傾向があるといえる(表2-4-7)。

小学校・中学校いずれにおいても、休日の業務は、学校での残業についても自宅での持帰り仕事についても、授業準備時間が長い。ただし、休日の残業時間と持帰り時間では業務に費やす時間が異なる。たとえば、小学校では休日の残業時間における授業準備は4分であるのに対し、休日の持帰り時間においては33分と増加する。また、中学校では休日の残業時間における授業準備は4分であるのに対し、休日の持帰り時間においては15分と増加する。ここから、休日の業務は学校で行うよりも、持帰り仕事として、自宅でより長い時間をかけて行っていることがわかる。

表2-4-6 休日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	授業準備	4分	部活動・クラブ活動	62分	部活動・クラブ活動	34分
2	保護者・PTA対応	2分	授業準備	4分	授業準備	4分
3	事務・報告書作成	2分	成績処理	4分	成績処理	3分
4	地域対応	2分	その他の校務	3分	事務・報告書作成	2分
5	成績処理	2分	事務・報告書作成	3分	保護者・PTA対応	2分

表2-4-7 休日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	授業準備	33分	部活動・クラブ活動	41分	部活動・クラブ活動	23分
2	成績処理	16分	成績処理	18分	授業準備	23分
3	事務・報告書作成	7分	授業準備	15分	成績処理	17分
4	学年・学級経営	5分	その他の校務	5分	事務・報告書作成	6分
5	その他の校務	5分	事務・報告書作成	4分	その他の校務	5分

### 3. 属性別にみた残業時間・持帰り時間

前節では、第4期(通常期)における平均の残業時間量・持帰り時間量の全体像を検討した。

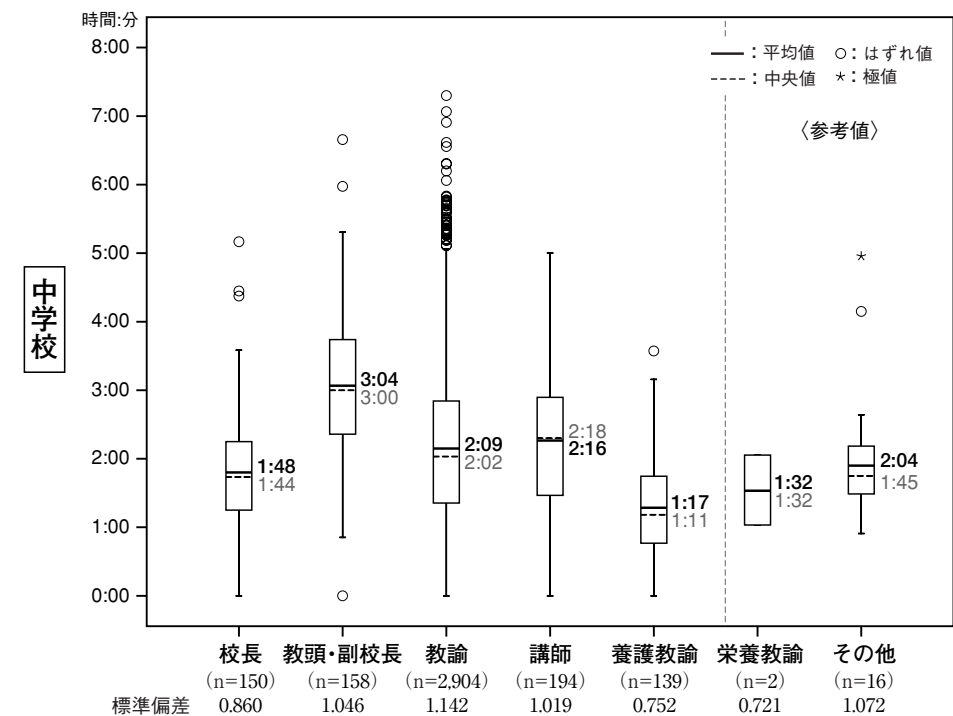
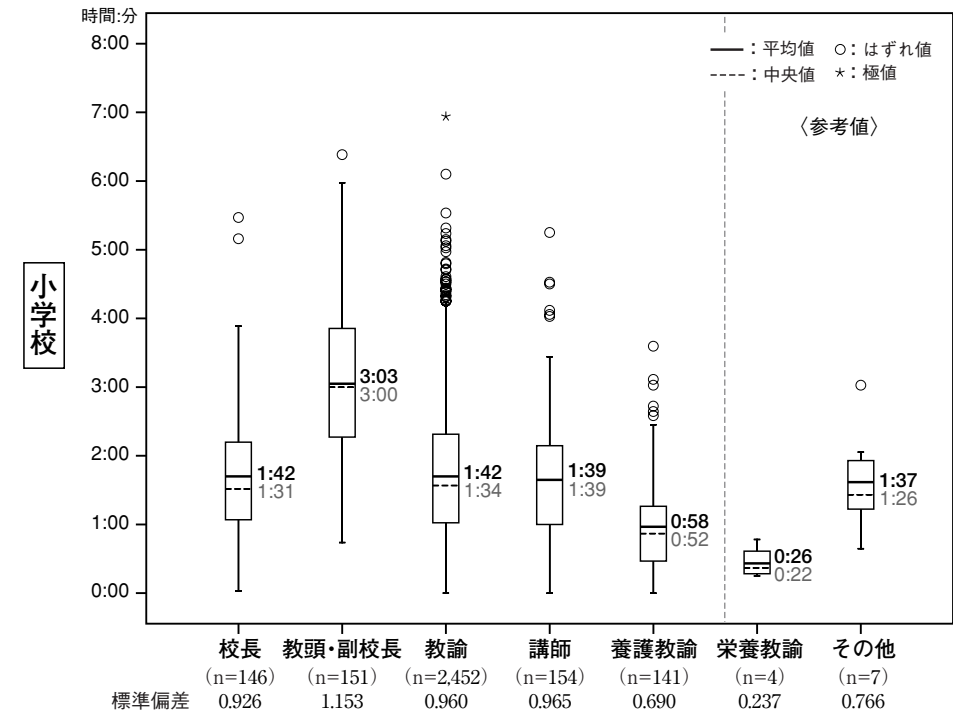
しかし、一人一人の残業時間量・持帰り時間量や、正規の勤務時間で処理できない業務を学校で行うのか、自宅で持帰り業務として行うのかといった勤務実態は、教員の性別や職階、年齢などの属性によって異なると考えられる。

そこで本節では、特に勤務日に絞り、属性別(職階別、性別、年齢別)に残業時間量・持帰り時間量の実態を明らかにする。

まずは職階別に、平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校のそれぞれについて検討しよう。

第4期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は、図2-4-5の通り、小学校の教頭・副校長は3時間03分、中学校の教頭・副校長は3時間04分であり、他の職階に比べて圧倒的に長くなっている。その他の職階については、小学校では校長と教諭は1時間42分、講師は1時間39分とほとんど差はない。中学校では校長は1時間48分で、教諭は2時間09分、講師は2時間16分と、校長よりも教諭・講師の方が30分ほど長くなっている。

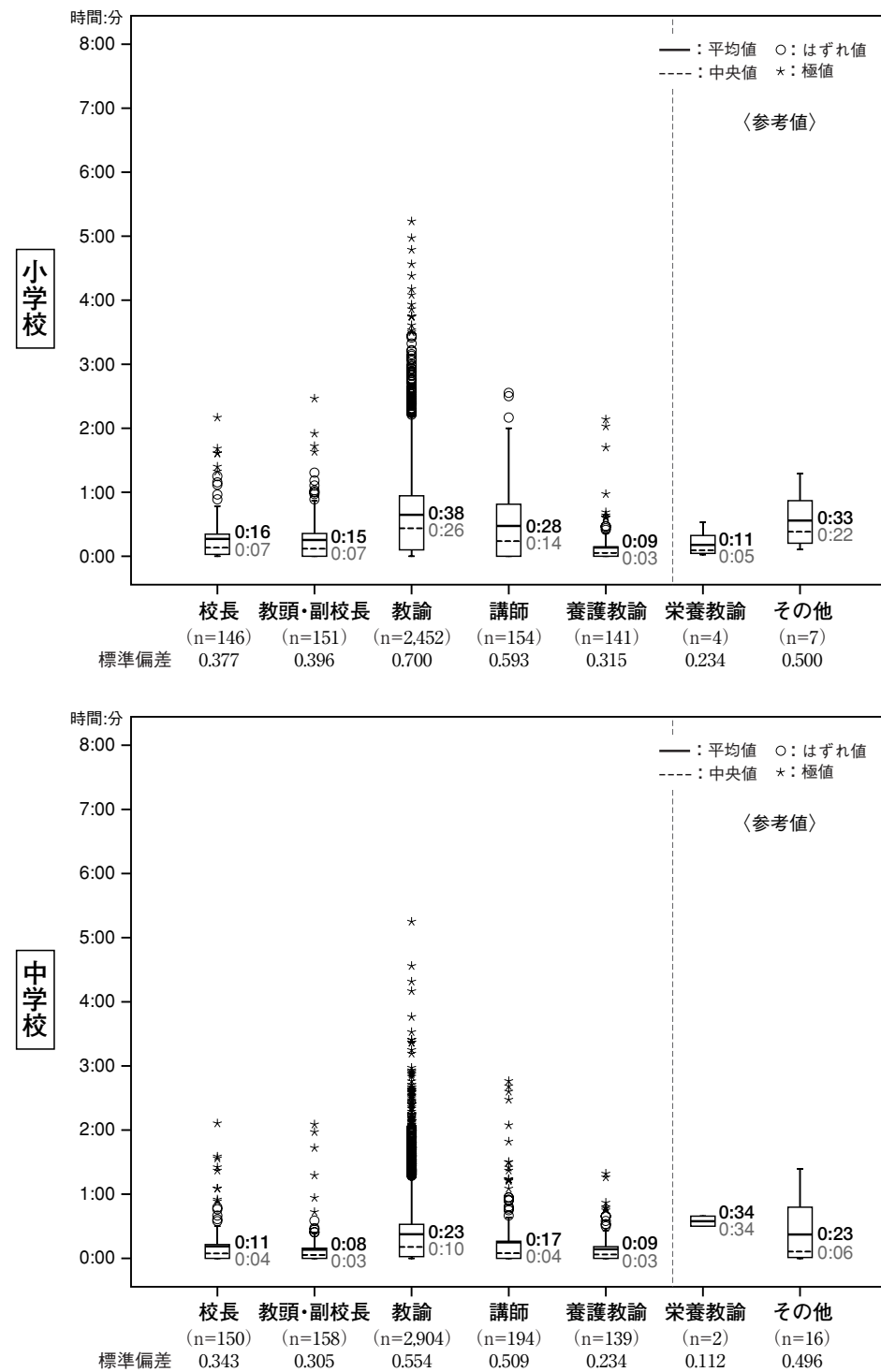
図2-4-5 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 職階別)



第4期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は、図2-4-6のように、小学校・中学校いずれにおいても教諭で最も長くなっている。小学校と中学校を比べると小学校の教諭の方が38分と長く、中学校の教諭は23分と短くなっている。小学校では、教諭につづいて長いのが、講師の28分、次が校長の16分、教頭・副校長の15分である。中学校では、教諭につづいて長いのが講師の17分であり、次が校長の11分である。

図2-4-5と図2-4-6の比較から、勤務日においては、学校では教頭・副校長が長く残業を行い、休日においては自宅で教諭が長く持帰り仕事を行っているといえる。

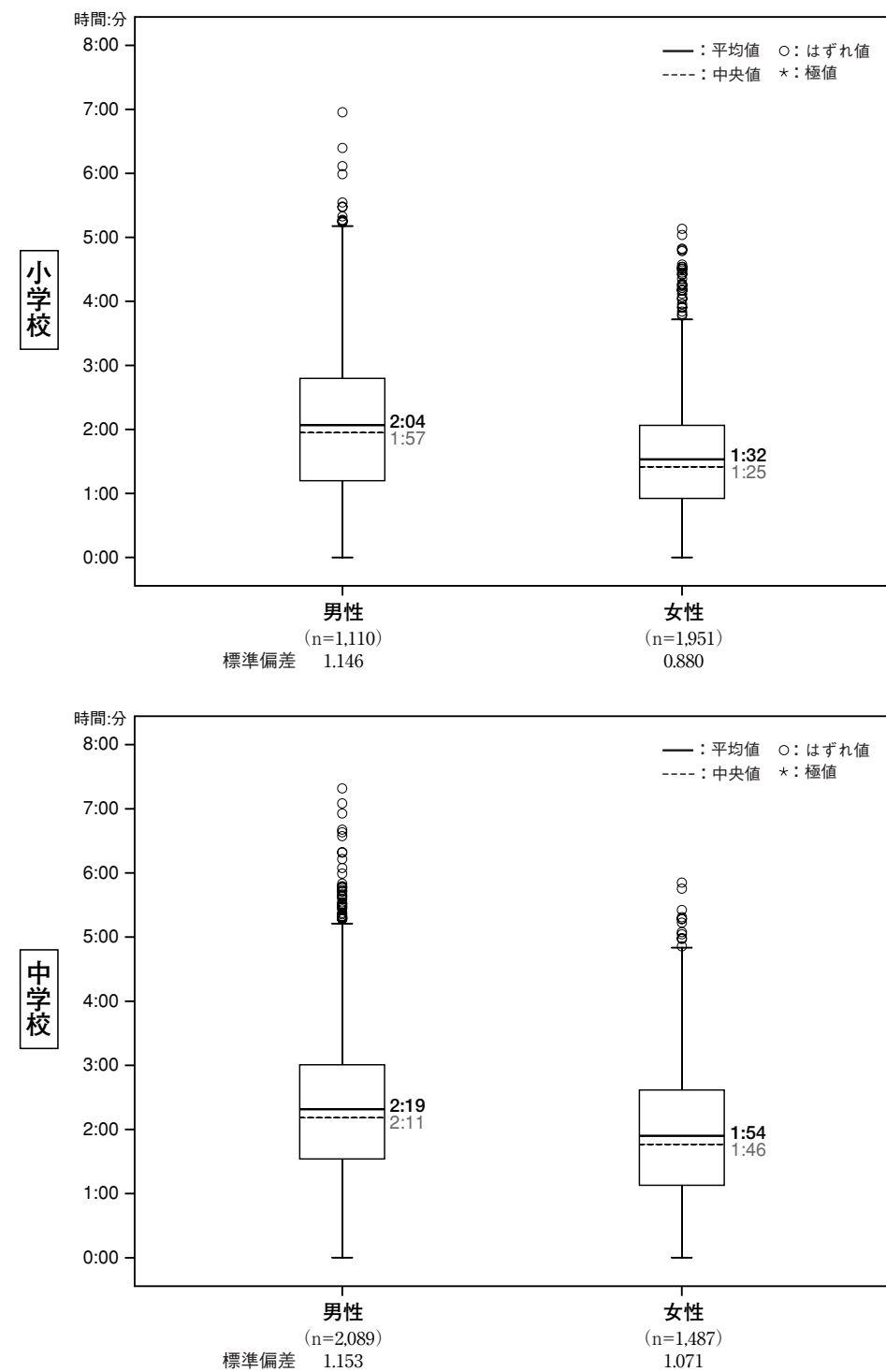
図2-4-6 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 職階別)



次に、性別で平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校それぞれについて検討しよう。第4期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は図2-4-7の通り、小学校・中学校ともに男性教員の方が女性教員よりも30分ほど長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 2時間04分、女性教員 1時間32分、中学校:男性教員 2時間19分、女性教員 1時間54分)。

これに対して平均持帰り時間量は図2-4-8の通り、小学校・中学校ともに女性教員の方が男性教員よりもやや長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 32分、女性教員 35分、中学校:男性教員 19分、女性教員 23分)。

図2-4-7 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 性別)





また、平均残業時間については中学校の教員の方が長く(図2-4-7)、平均持帰り時間については小学校の教員の方がやや長いこと(図2-4-8)を考え合わせると、小学校の教員は自宅で、中学校の教員は学校で残業を行う傾向があるといえる。

最後に、年齢別に平均の残業時間量・持帰り時間量の実態を検討しよう。ただし、この場合、職階の影響をのぞく必要がある。たとえば51歳以上には管理職が多く、この年齢層で残業時間・持帰り時間が長い場合は、年齢の影響だけではなく職階の影響も考えられる。そこで、教諭のみを取り出し、教諭の年齢別で残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校について分析を行う。

第4期(通常期)の勤務日における教諭の平均残業時間量は、小学校・中学校いずれにおいても30歳以下で最も長く、小学校では2時間23分、中学校では2時間58分である(図2-4-9)。しかし、年齢層が上がるにつれて残業時間は減少する。小学校では31~40歳で1時間49分、41~50歳で1時間35分、51歳以上で1時間22分である。中学校では31~40歳で2時間23分、41~50歳で2時間03分、51歳以上で1時間31分である。ここから、年齢層の高い、いわゆるベテラン教諭になるほど平均残業時間が減少していくといえる。この原因は、経験を積むことによって授業などの準備時間が短縮されることや、若い年齢層ほど部活動などの業務が任されることなどが考えられる。

図2-4-8 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 性別)

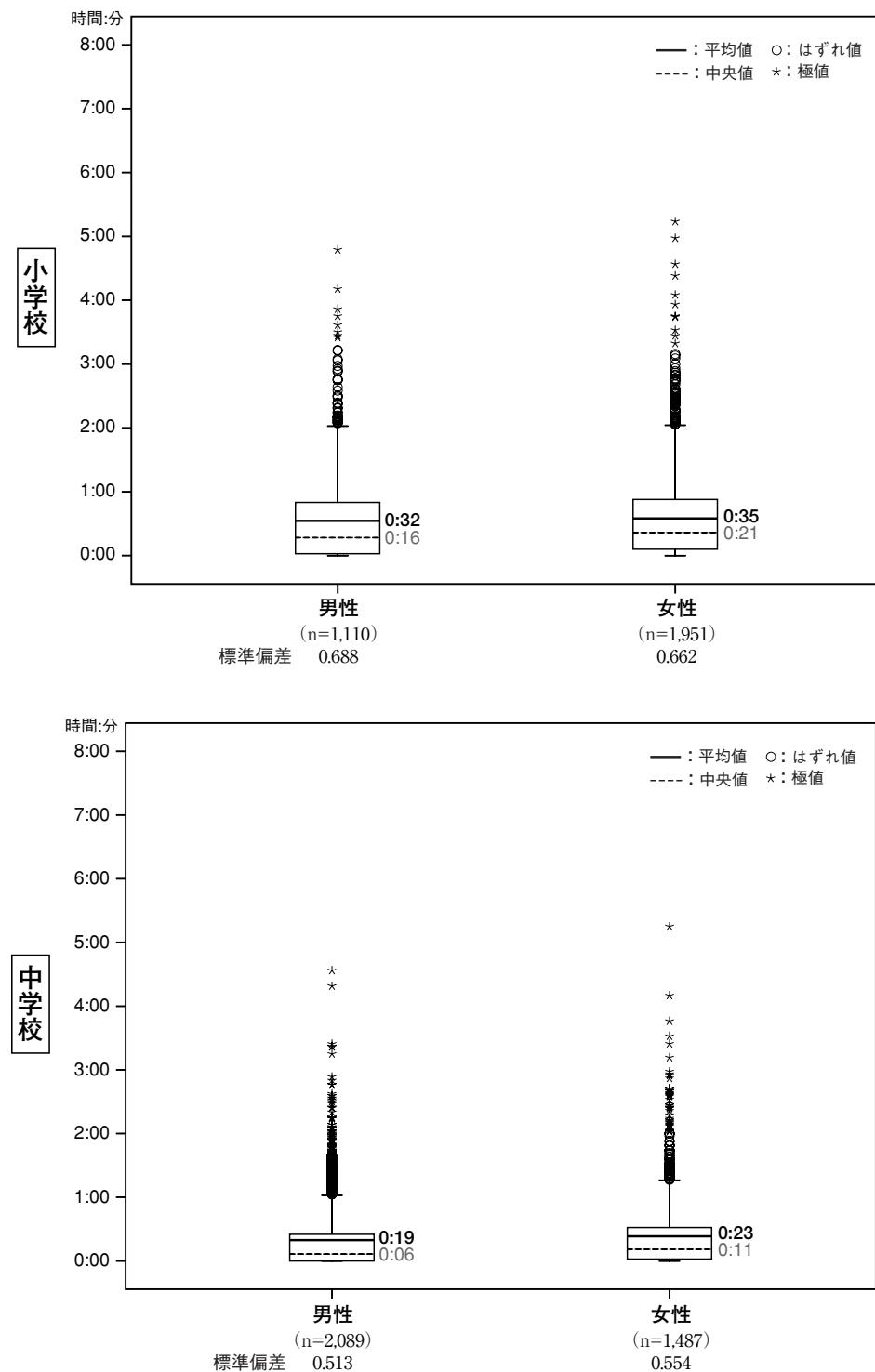
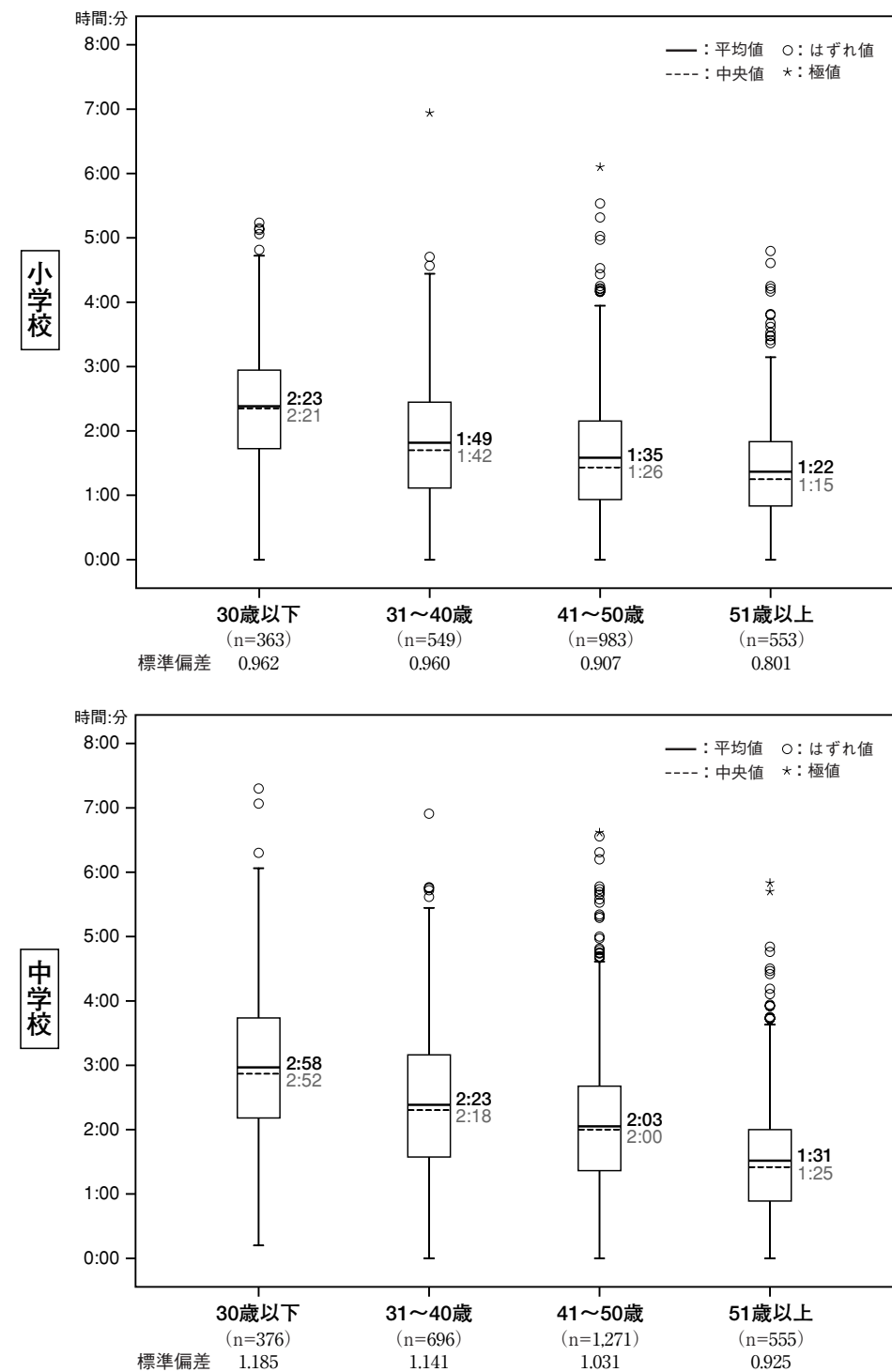


図2-4-9 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



第4期(通常期)の勤務日における教諭の平均持帰り時間量は、小学校・中学校いずれにおいても30歳以下が最も短い。小学校では30歳以下で32分、31~40歳で38分、41~50歳で42分、51歳以上で36分である。中学校では年齢による差はあまりなく、30歳以下で20分、31~40歳で23分、41~50歳で24分、51歳以上で22分である(図2-4-10)。勤務日における残業時間と持帰り時間を比較すると、小学校・中学校いずれにおいても、残業時間は年齢が高くなるにしたがって減少する。これに対して小学校の持帰り時間については、いわゆる中堅からベテランにあたる41~50歳の教諭で長くなっている。中学校の持帰り時間には、年齢による差はあまりみられない(図2-4-9、図2-4-10)。

図2-4-10 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 教諭の年齢別)

